

## 村越真のオリエンテーリング日誌

# Fast life, slow life

友人の多い香港はいつも訪れるのが楽しみな場所だったが、コントロールをしていた今回は勝手が違った。つらさと気楽さが交錯するたびは、楽しさとともに、苦い思い出の残る旅となった。

### 11月23日

今週はもともと21日、23日、26日と、珍しく3回とも本務で東京に行く予定だったが、さすがに疲れていた。26日はキャンセルできないので、23日をキャンセルした。雨が降りそうだったので、午前中に15kmのジョグ。天気が持ったので、夕方さらに自転車で日本平山頂へ。トレーニングと言えるほどの運動ではなかったが、1日に2セッションしたのはいつ以来だろう。フィジカルに充実したアスリートらしい一日を過ごす。

### 11月27日

約3年ぶりの人間ドックへ。予想はされていたことだが、悪いところは一つもなかった。これまで5回受診しているが、だいたいにおいてトレーニングをしていない時の方が診断結果がよい。バリバリにトレーニングをしていた30代前半などは、腎機能も心電図も糖負荷検査もおかしかった。夕方のランニングも久しぶりに気持ちよく、食事もおいしい。

### 11月28日

自転車で大学に行き、ランで帰る。帰宅時のランはやや疲れを感じたが、もう10年以上も経験していないランナーズハイが訪れた。

### 12月2日

午前中は、静岡駅近くの会場で行なわれた大学の公開講座で1時間ほど講演。「スポーツで子どものやる気を引き出す」というテーマで、同僚の吉田さんと二人での講演。最近では講演というタイトルの人がパワーポイントなので、あえて、配付資料もない徹底アナログの講演をしてみた。ホワイトボードに書き込みながらの講演は、話すスピードが程度に調節されて、かえって聴衆の理解が進むような気さえする。

午後は14時から原宿でJOAの委員長会議に出席。



アジアを担う若者たち：左から加藤弘之（ミドル・ロング2位）、李季（リ・ジ：中国、スプリントチャンピオン）、番場洋子（ミドル・ロング優勝）、モ・ヨンシャン（中国、ミドル優勝）。香港 APOC ミドル会場にて

翌3日は、JOA 理事会。早く寝たせいもあるが、だいたいこういう時は興奮するので、眠りも浅く、目覚めも早い。5時に目覚めて、しばし原稿執筆。短期的に取り組めることはほぼ取り組んだので、いよいよ定款や会費・登録費を含めた構造改革に着手しなければならない。現在のJOAが、指導員の登録費と都道府県協会の会費に大きく依存している一方で、指導員登録が減少し、都道府県協会の中には財政的に会費支払いの困難な協会が始めている。こうした点に、より多くのオリエンティアの目が向くことが必要だろう。

### 12月8日

アメリカの心理学会の学術誌に掲載した論文がリジェクト（掲載不可）で返ってきた。朝方、カバーレーターで触れていない点について明らかにしてほしいというメールがあったので、返事を書くと、午後には掲載不可とその理由がメールで知らされてきた。手紙の主であるエディターは、一流の研究者であろうが、その仕事の手早さと、論点の明確さには、落胆という気持ちを通り越した爽快感を感じる。アメリカの研究者の生産性の高さを見た。

### 12月16日

山と渓谷社が出しているアドベンチャースポーツマガジンの来年号で、トレイルランナーたちが、各自のお気に

入りのコースを紹介するという特集が組まれる。その依頼で、朝霧高原の東海自然歩道取材しがてら走りに出かけた。

朝霧の麓にある静岡大学の野外活動施設に車を止め、そこから鳴沢の氷穴までは、国道139号を使ってマウンテンバイクで移動する。そこから、東海自然歩道沿いに走って帰ってきた。走った距離は20kmくらいだが、2時間以上走るのは久しぶりだ。「走り切れるだろうか」という心細さが、茫漠とした朝霧高原の景観にマッチしていた。

### 12月20日

大阪のモンベル本社と神戸の好日山荘を訪問した。モンベルでは創業者社長の辰野氏が1時間半も熱心に話しを聞いてくれた。「どうして30年以上も歴史があって、普及しないんでしょうね。初対面で失礼な言い方もかもしれないけれど」など、オリエンテーリングの現状に対して、鋭い疑問を投げかけられた。今後具体的にどんなコラボレーションができるのかは未知数だが、彼らが顧客向けに展開しているイベントなどで、オリエンテーリングをアウトドア活動者に知ってもらうチャンスが生まれそうだ。

午後は神戸の好日山荘本社へ。店長さん向けの「地図とコンパス」の講習会の講師を依頼された。日頃「コンパスの説明書はひどい」とぼろくそに言

っている。ショップの人に正しい使い方を知らず、消費者にも伝わりやすい。コンパス利用啓発のいいチャンスと考え、引き受けた。商売でコンパスを扱っている方たちはかなりなので、日頃の講習会ではしゃべらないようなコンパスについての蘊蓄をふんだんに盛り込んだ話が受けた。

### 12月23日

朝は、やや焦燥感から目が醒めた。明日から APOC のため香港に行くので、今日中に年内提出の論文を仕上げなければならないからだ。昨年も同じ時期の論文執筆は、時間はあったにもかかわらず、とても取りかかれる状態ではなかった。それを考えると、1年たって、状態はずいぶんよくなったと言えるのだろう。

早めに帰っての夕方ジョグも気持ちよい。明日から僕がいなくなる我が家は、クリスマスディナー。

### 12月24日

その昔、シャクターという心理学者が今ではとても許されそうもない実験をした。生理的喚起状態を催す薬物を注射した後、一方の群の被験者は嬉しそうにしているサクラ被験者の中に入れ、他方の群の被験者を怒っているサクラ被験者の中に入れた。すると、同じ生理的喚起状態であるにもかかわらず、嬉しそうにサクラの中に入れられた被験者は、自分の生理的喚起状態を「嬉しいことに由来する興奮」と解釈し、楽しく感じた。他方、怒っているサクラの中に入れられた被験者は自分の状態を「怒っていることに伴う興奮」と解釈し、不快に感じた。感情は生理的喚起とそれに対する意味づけで成り立っていることの証拠としてよく引用される研究である。

昨夜からよく寝付かれなかった僕は、多分生理的喚起状態にあるので、普段なら「ワクワク」といった感情が知覚され、「香港に行くことで興奮しているのだ」と解釈するのだが、「楽しさ」を感じられない今は、それがむしろ「心がわさわさした」不快で不安感なものに解釈されてしまう。おそろべしシャクター。

香港到着後、ホテルでパトリックと軽く打ち合わせ。

### 12月25日

香港滞在の最初の二日は、APOC の全ての MWE のコントロールを見て回った。初日のリレー・スプリントはコンパクトなので、大したことはなかった。だいぶ疲れはしたが、時間は十分に余っていた。明日やる予定だったモデルのチェックもしてしまうことにした。モ

デルのトレインは、ランタオ島にある香港空港への吊り橋であるチンマ橋と香港の高層ビルの街並みがよく見える。

二日目のロングとミドルは、一人でフェリーに乗って、その後トレインまで 2km 以上歩いていった。アッパはきついし、作業量が多いので、朝から精神的にネガティブな気分だった。まだ未チェックのコントロールが何十個と残っているなんていうことは極力考えないようにして、淡々とコントロールチェックをした。気分がネガティブモードに入っているせいか、コントロール位置に着いて、あるはずのテープが見つからないくらいで気が滅入る。

香港は、いつ来ても落ち着く場所だったが、同時に、今のような体調だと 4 レースのコントローラを無事に務めることができるだろうかという不安も強い。自分はここで癒されるのか、苛まれるのか、そんなことを自問しながら香港滞在が始まった。

ロングとミドルを一日でチェックしてしまったので、27 日の昼間は滞在中唯一ゆっくりできる時間となった。昼間は買い物をして、ホテルでのんびり過ごした。

地図の一部の印刷があがるので、夕方に協会の事務所にいって、地図のチェックをする約束になっていた。19 時にパトリックと待ち合わせて、夕食を一緒にとった。夕食の最中にパトリックが「いいニュースと、悪いニュースがある」と言った。いいニュースは地図が予定より早く印刷されたのだという、悪いニュースは「だからシンは遅くまで地図チェックをしなければならぬ」ということだ。もちろん、それはいいニュースだ。印刷屋が地図を持って来る 21 時に合わせて協会のオフィスにいくと、21 時だというのに大会準備作業は一向に収束する気配がなかった。こういう刺激の中に身を置くと、自分たちで世界選手権を開催した 1 年半まえのことが思い出され、楽しくなってくる。

### 12月28日

モデルイベントを見て、そのまま OHAK のあるオリンピックハウスに行った。3 時からミドルの地図をチェックし



APOC ロング。走っているのは中国代表のツ・ミンユ(ロング 2 位)



香港協会メインの運営者たちと。

て、4 時からアジア地区発展のためのミーティングに参加した。2 年くらい前からしつこく提案していたアジア選手権開催の提案は、初めて国際的な舞台に顔をだした韓国にも受け入れられてしまった。むしろ、アジア選手権の開催は大会への注目度を高めるので、大歓迎といった雰囲気だった。その重さ・技術的な障壁が分かっているのか、やや不安だが、アジアがまた一歩前進した。

### 12月29日

スプリントの日。スタート開始の 1 時間 30 分前からチェックを始めたが、未設置のコントロールばかりだった。おまけに隣の特徴物についているコントロールまであった。設置が全て終わったのはスタートの 10 分前だった。設置する端からコントローラがチェックするという、泥縄状況。いくつかのトラブルは僕のチェックで解消したが、立ち入り禁止テープの設置ミスなど、小さなミスが出てしまった。立ち入り禁止の道路に入って失格になる選手も何人か出た。ルール通りの表記とはいえ、そのリスクは分かっていたので、主催者にもっと対応を促すべきであった。



主催者の経験は何度もあるが、「補佐役」であるコントローラの経験は国際大会では初めてなので、文化的にもどこまで強く出ているのか分からず、それが判断の甘さにつながってしまったのかもしれない。反省！

## 12月30日

リレー。多くのけが人が出た。病院に運ばれた怪我人は、6人にも上った。それは防げたことではないのだろうか。この日の運営の中心にいた若い運営者のソロモンと、互いに口にはしなかったが、自問していた。男子ナショナルチームの1走佐々木は、トップから10分以上たっても帰ってこず、ケガではないかと心配していると、やはり脚をひきずってきた。その姿は痛々しかったが、皆川に比べればましな方だった。皆川は、同じように深い穴に落ちて足首を粉碎骨折し、自力ではい上がることができず、笛を吹いて助けを待ち、救出に1時間以上かかっている。ハードに競技をしていればこういうことあるのだとは分かっているが、本人に何の責任もない穴への転落は、やはり苦難以外の何者でもない。皆川の救出には、20名以上の消防士が出動し、その模様は定時ニュースでも報道された。

## 12月31日

主催者にわがままを行って、役員宿を引き払い、参加者のいる街中のホテルに昨日から移っていた。朝、参加者と一緒にバスで会場入りし、そのままレースエリアに向かった。最初の誘導を間違えたせいで、正式の誘導路とは別の道を通ってレースエリアに向かってしまったらしい。行き方は分かっているから、自分自身は全く問題ないのだが、誘導がついていないことで、運営への不安を募らせてしまった。おまけにパトリックが昨日の事故で弱気になっていて、「危ないコントロールがあるからキャンセルすべきだろうか」という。今さらコース変更しても混乱するだけである。写真も撮ってあるからというので、それに注意書きをつけて、スタートで示せばいいとアドバイスする。気になるコントロールをいくつかチェックして、エリートのスタートにいくと、スタート前4分間のボックスの作り方がおかしいし、スタートフラッグへの誘導も不完全だった。役員がスタンバイしたのが、ほんの10分前。案の定、トップスタートをうまく誘導できなさそうだったので、その場でアドバイスしながら、スタートを開始させた。その後も小さなトラブルは何度も起こったが、破局的な事態にはならず、スタートを終了させる。

コースの長さはやや気になっていた

が、実際長すぎた。トップスタートから2時間たってもゴールがなく、ようやく2時間20分くらいすぎたところから、競技者が戻ってきた。最終的には優勝タイムは108分になったが、棄権者も続出だった。それに比べれば、女子はまだ良かった。番場が80分のタイムを出してくれたが、「村越さん、これオリエンテーリングじゃないですよ」と文句を言われた。植生の特徴や1年間の移り変わりを現地を感じていないと、「そんなに遅いはずはない」と言われると、なかなか強くは主張しづらい。

コースは長いわ、ゴール後イベントセンターまで30分近くかかるので、リザルトもなかなか確定しなかった。帰りのバスは3:45に設定されていたが、表彰式が始まったのが3:30すぎで、各クラスいちいち写真をとる時間をとっていたので、終わったのは4:30に近かった。運営者も手一杯の今回の運営は全く身体に悪い。それでも山を越えた気分だった。

この日は同宿の石田夫婦を誘って雲南料理を食べに行った。こんなに食事をおいしく感じたのは日本を発って以来だった。

1日のミドルでは運営もだいぶ落ち着いてきた。いくつか気になるコントロールをチェックしたが、技術的には問題もない。スタート枠も、今日はしっかり作られていて、パトリックがついているので、心配なかった。15分ほど眺めて、トレイン内で写真を撮りながら、ゴールに向かう。「今日は楽しめました」という多くの人の感想に安堵しながら、イベントセンターに降りた。表彰式の開始時間もスムーズだった。リレーで大きなケガはあったが、それ以外にはなんの技術的問題もなかった。残念ながら、大会をやり終えたという安堵感にはなかったが、不安な時にでる肩の張りはなかったため、身体は安心していただろう。

18:30から市内でバンケットが行なわれた。大会中の写真で構成したスライドショーや、乾杯の儀式など、エンターテイメントが満載された、楽しいバンケットだった。

ボランティアチームや若手運営者が、空いた時間に正面のステージに現れては写真を撮り、また紹介されて皆の拍手を浴びていた。若手運営者たちから一緒に写真を撮ろうと誘われた。彼らは12年前、最初に香港と日本で一緒に行なったジュニアトレーニングに参加した連中たちだった。その「種まき」に10年前に関われた喜びを改めて感じた。僕のことを気軽に「shin!」と呼んでくれる若者たちと一緒に、海外を感じさせない気持ちで運営できた大会でもあった。

## 1月5日

宮内と二人で執筆中の「読図問題本」の件で山と渓谷社を訪れる。本の話から始まって読図検定をウェブでやれないかとか、富士山アウトドアマップを山ケイのHPで配信できないか、トレイルランニングの本の話など、話はどんどん広がった。

9割方完成した原稿を預けてくると、週明けに「構成方針やヴィジョン、素晴らしい」とのコメントをいただき、勇気づけられる。初稿で「読図問題を解くのは知的興奮」と書いたら、宮内からは「知的興奮ですかあ〜。私は興奮しませんね」と揶揄された。自分が特殊なのかと、やや懐疑的になっていたが、山本さんのコメントで内容への自信が再びわいてきた。自信と不安が交錯するくらいのもの方が、大ブレークの可能性もあるはずだ。

この後JOAへ行って予算編成。ディレクターやインストラクターの登録費に多くを負っているJOAは、その減少で大きな財政的危機に瀕している。現在のJOAの活動を考えたら、そもそもディレクターやインストラクターに収入を依存していること自体間違っている。この危機こそ財政構造を変える好機なのだ。山ケイ訪問のあとは目茶目茶疲れていて、JOAでは「とても会議続けられない」と思うほどだったが、不思議なことにそれを突き抜けるとハイになっていた。

## 1月8日

日本中が大荒れだった日、静岡でも雪が舞ったのだが、清水は天気だけはよかった。夕方日本平へジョグ。風の強さに涙が出たが、富士と清水の夕映え風景に癒される。翌8日は4月に行なう市民大会のための地図調査。半年ぶりの調査だった。

## 1月17日

文部科学省の登山研修所の専門委員会のため、富山に日帰りした。行き帰りの電車の中では、パソコン仕事もできるし、車窓を流れる風景は気分転換になる。富山は全く雪がなく、登山研修所のある立山山麓も40cmしか積もっていないようだ。

昨年は同所の研修で何度もナビゲーション講習の依頼を受けたので、それがどのような評価を受けたか興味があったが、好評だったようだ。教授の体系としてもノウハウとしても、「登山界においては未開拓の分野」ということで、オリエンテーリングも含めて今後もプロモーションの余地は大にある。